

## 島根県隠岐島・西ノ島町船越のトビウオ漁と糸満漁民 —出漁漁民の非移住と在来漁業の関係—

野地恒有

Tsuneari NOJI

(日本文化選修・民俗学)

### 1 糸満漁民の隠岐出漁と非移住

#### (1) 桜田勝徳の「隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書」について

昭和のはじめころ、沖縄旧糸満町出身の糸満漁民の出漁範囲は、日本海側では、壱岐・対馬から、島根県の隠岐、八束郡鹿島町、京都府舞鶴市の大浦半島、そして、新潟県佐渡に及んでいる\*1。そのなかで、昭和10年(1935)の8月に隠岐島に出漁中の糸満漁民について、当時アチックミュージアムの研究員であった桜田勝徳が調査をおこなっている。この調査のいきさつをみると、10年(1935)4月に糸満漁民がその年の夏に隠岐島に出漁してくるとの情報が入り、アチックミュージアムでは、この機会をとらえ、10年8月に桜田勝徳、山口和雄、岩倉市郎の3人が12日間の隠岐・島前調査を行った\*2。この調査のうち、隠岐の漁村調査の成果は、桜田勝徳・山口和雄「隠岐島前漁村探訪記」(1935年12月)となり、糸満漁民調査の成果が、桜田勝徳「隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書」(1935年11月)となったのである。島前(どうぜん)とは、隠岐諸島のうち3つの島をさしており、4つの人の住む島からなる隠岐諸島のうち、位置関係から、本島を「島後(どうご)」、西ノ島、中ノ島、知夫里島をあわせて「島前」といっている。

「隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書」の内容についてみると、隠岐・島前の黒木村船越(現在の西ノ島町船越、1957年に黒木村は浦郷村と合併して西ノ島町となる)に追い込み網漁で出漁してきた糸満漁民の大城組(大城カメ)から、社会組織、漁撈組織、漁法、漁業経営、船・航海などについて聞書をおこなった報告書である。この「隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書」の意義は、戦前の糸満漁民の出漁状況について、記録がほとんどされていないなかであって、桜田の報告はその唯一の記録ということが出来る。そして、実際に出漁中の糸満漁民を調査した資料的価値は高い。

しかし、出漁先の糸満漁民からおこなった糸満漁業全般についての調査に重きが置かれ、出漁先のなかで

の生活や隠岐船越の漁業や住民との関係についてはあまりふれられていない。桜田は、戦後に「漁村民俗」研究を展開するにあたって、地先沿岸漁業と出漁漁民の関係について問題提起するが、昭和10年のころには、『漁村民俗誌』(1935年)にみるように、海女や家船、そしてこの糸満漁民のような専漁者への関心が高かったわけである。

そのなかでも、この報告から隠岐出漁形態について、以下のことを知ることができる。

大城組は、正月に沖縄を出て、1月から5月まで高知県の沖島で漁を行い、5月から8月末まで隠岐で漁を行い、再び高知沖島で漁を行い、9月中旬に沖縄に帰る。隠岐ではマワシタカミ漁という追い込み網漁を行い、タイ、イサキ、ハス、クロイオなどを獲った。隠岐への出漁は大正中期ころからおこなわれていたというが、昭和10年の出漁は、船越の安達家との契約によるものである。安達家は、「旧藩時代に長崎俵物を取扱った御用商人の家柄」であり、「島前切っ手の漁業企業家」である。船越で行われた糸満の漁業は、「同地の企業家安達氏と大城組の両方で経営」され、「安達氏は、イサキ漁業に有望な島前の漁場に対する漁業権を、各組合から一定期間買い、その権利を大城組に貸与すると共に、大城組に依って漁獲せられた魚の全部を独占的に買い占め」という形で行われた。船越では、安達氏は、糸満漁業のほかに、潜水夫漁業、鯛地漕網漁業、大敷網漁業を経営し、水産物製造元でもある。アチックミュージアムに糸満出漁の情報をもたらしたのは、この安達家(安達和太郎)である。\*3

隠岐滞在中は、糸満漁民たちは、安達氏が提供した農家・納屋を宿舎とした。糸満の漁業が休みの日に、宿舎を訪ねた桜田は、その様子を次のように書いている。

「仲間に散髪して貰っているものがある、また数名が集って蛇皮線を弾き歌を唄っているものがあるという風で、珍しく和やかな情景を見る事が出来た。平常の日なれば四回の過激と思える漁撈に従事し、沖から帰ってくると、舟や漁具の手入れに日はくれてしまう。糸満の人々は沖から帰ってくれば、舟を

陸に引あげ、潮水で之を実に丹念に洗っているの、此漁具を大切に作る風は船越の人々を驚かせていた。それで我々が一寸覗いただけの推察では、常の日の宿舎生活は寝るのと食うのとで恐らく全部で無いかと思う位であった。

さて蛇皮線の聞える夕方の宿舎の庭では、原始的な三ツ石の竈の上に大鍋が沸り、其上には大きな……甑がのっていた。之は網を蒸している所で、甑の中には網が一杯に詰め込んであった。夕方まで干された網は、此の甑の中で約一時間蒸され、つややかな黒色に仕上げられて網はこの中から曳き出される。」\*4

桜田は、網染めの様子や船や漁具の写真を撮っている。また、16ミリの撮影機を用いて、追い込み網漁を記録したという\*5。

次に、桜田以降の、隠岐島への糸満漁民の出漁に関する成果についてみると、沖縄において糸満漁業について研究を進める上田不二夫の「戦前期糸満系漁民の出稼ぎ—島根県・隠岐の島安達家と廻高網漁業」、『イサキ取り』(『沖縄の海人—糸満漁民の歴史と生活』1991年、沖縄タイムス社)をあげることができる。

上田は、安達家所蔵の糸満関係書類の「イサキ漁業関係書類」から、安達家と大城カメとの契約書を具体的に紹介し、出漁が4月から10月の期間が契約され、安達家と糸満の関係が昭和7、8年から17年まで続いたこと、安達家側の実質的な現場責任者としての番頭の存在などを指摘している\*6。

また、九州大学のおこなった糸満漁民の総合調査の中で、益田庄三は、「出漁(出稼ぎ)G隠岐、若狭」(中橋興編著『日本における海洋民の総合研究—糸満系漁民を中心として—』下巻、1989年、九州大学出版会)において、取りあげている。

益田は、聞書資料から、大正から昭和にかけて糸満の出漁はあったが、安達家との関係は昭和10年代の4、5年間であること、糸満漁民は島前の大森島(島前・中之島の沖合)を主な漁場としてイサキ漁に従事したことを明らかにした。そして、出漁者の受け入れ、つまり糸満漁民の入村・居住と追込網の操業には、身元引受人としての地元有力者の役割が大であったこと、とくに、出漁先での生活に対する地元民の印象を聞き取りして、交流はあまりなかったが、地元有力者の身元引受人がいる限り外来者の受容に寛大であったことを指摘している。また、安達家が経営した漁業のなかで、長崎県、富山県、朝鮮からも漁民を雇い入れており、長崎県や富山県の漁民のなかには隠岐に定着したものがいたが、朝鮮と糸満の漁民の移住は皆無であったことをことを指摘している\*7。

以上をまとめると、次のようになる。

①島根県隠岐島西ノ島町船越への糸満漁民の出漁は、安達家との関係でおこなわれたこと。

②その期間は、昭和10年代のことであったこと。

③大森島を主な漁場として、4月から10月の間で、イサキを主対象魚としたこと。

④船越への糸満漁民の移住はなかったこと。

## (2) 与論島漁民の隠岐出漁

隠岐方面への出漁は、大城組の糸満漁民だけでなく、糸満漁民に雇われた後に独立した与論島漁民たちによる出漁もあった。その1例を、聞書調査からあげる。資料は、平成6年(1994)8月に与論島(鹿児島県大島郡与論町)茶花でえられたものである。

聞き取りをおこなった若松北川氏は、与論島妻屋東区出身の明治43年(1910)生まれである。若松4兄弟の2男であり、屋久島の第2期の移住者である若松内渡美氏が長男、内中氏が3男である\*8。北川氏からの聞書は、さまざまな人によっておこなわれ報告されている\*9が、以下は、筆者が聞き取りした資料である。

若松北川氏が19才のころ、沖縄からきて四国方面に追い込みできていたオオシロカメが、与論に人を雇いに来た。(このオオシロカメとは、桜田勝徳が隠岐で聞き取り調査をおこなった人物である。)追い込みには人間が35、6人以上40人ぐらい必要とするので、北川氏が雇われて、四国に3年間で3回いった。5ヶ月から6ヶ月間いった。四国では、高知県幡多郡の沖の島、宿毛から足摺岬に行った。セモノをとった。

3回3年四国に行き、4年目に、昭和7年頃、兄の内渡美氏を呼んで、与論の人と愛媛県の宇和島にテングサ取りに行き、テングサ取りの明るる年には、与論の若い連中を集めて、四国の宿毛方面に追い込みに行った。

兄の内渡美氏は、与論のマスダカネトクと追い込み網で屋久島に行っていた。15から18人の小さい追い込み網漁だった。マスダカネトクは、北川氏の母方の親族だった。

北川氏は糸満の追い込み漁では、五島列島、山口県、島根県、福井、石川の能登半島輪島、新潟の佐渡島まで行った。

出漁先では、港のそばに間借りして、分散して生活したという。隠岐では泊まる場所は決まっていたという。隠岐には、3ヶ月間にて、ブリやイサキなどを獲った。

島根県の恵曇に、青山ゼンジロウ、ゼンタロウといって、缶詰工場や巾着網で、隠岐や朝鮮方面に出漁する漁業を営む大物がいた。その人を頼って、隠岐の漁場を交渉したり、隠岐の全島、西郷、浦郷、別府、知夫などにいった。青山の船を北川氏が使うという条件で、その人(青山)に頼んで隠岐の漁場使用の契約をしてもらった。

隠岐から米子に魚を持ってきて、売って、その後、鳥取県の米子の航空隊の養成所にいた、弟のタケオに

会に行ったりした。鳥取震災（1943年9月10日）のときには、隠岐にいた。

日本海の方面には、7年間ぐらい出漁し、戦争が激しくなって若い者が徴用されていって、乗組員が集まらなくなり、出漁することができなくなった。戦後には、鹿児島にしばらくいて、そこで、復員してきた兄と、糸満の連中を集めて、追い込みを昭和22年(1947)に2回やった。

北川氏は、その後、与論島で追い込み網を開始している。また、北川氏といっしょに出漁した内渡美氏は、屋久島へ移住した。

この聞書から、次のことがわかる。

- ①与論島からも追い込み漁で隠岐へ出漁していたこと。そして、その期間は、昭和10年(1935)前後から18年(1943)である。先にみた益田庄三の聞書によれば、北川氏の恵曇出漁は昭和13年(1938)とある\*10。
- ②隠岐への出漁には、島根県の恵曇の「青山ゼンジロウ、ゼンタロウ」という「缶詰工場や巾着網で、隠岐や朝鮮方面に出漁する漁業を経営する大物」との契約によるものであったこと。この青山とは、先にみた益田庄三によれば、青山善次郎・善太郎親子であり、隠岐の安達家に遅れて島根県恵曇へ糸満漁民を受け入れた地元有力者とある\*11。筆者調査の聞書からでは、北川氏が島根県恵曇を経由して隠岐へ出漁したことがわかる。

### (3)問題と方法

隠岐島西ノ島町船越には、糸満漁民や与論島漁民の出漁が行われていた。しかし、そうした出漁漁民と在来の隠岐島民との交流は薄く移住もみられなかった。

そこで、本稿では、出漁漁民の出漁はあったが移住はなかったという地域を非移住地域として、まず、非移住地域の船越における、糸満漁民や与論島漁民の出漁が行われた当時の、在来漁業で中心的な漁業であったトビウオ漁の特徴を明らかにする。そして、船越のトビウオ漁について、出漁漁民をスミテとして受け入れた屋久島(鹿児島県熊毛郡)のトビウオ漁(ジキトビ漁)と比較することにより\*12、船越において出漁漁民と在来漁民の交流が薄く定住することもなかった要因について、船越のトビウオ漁の特徴から考察する。

## 2 船越のトビウオ漁・四ツ張網とテエナの役割

### (1)沿革

昭和のはじめのころ、船越の漁業活動として、四ツ張網、地曳網、シイラ網、イカ釣、カナギ(磯漁)がおこなわれていた。四ツ張網の漁獲対象は一般に、アジ、サバ、トビウオ等であるが、船越ではトビウオが中心となっていた。現在は刺網でトビウオは獲られて

いる。ここでは、昭和10年頃にトビウオを漁獲対象としていた四ツ張網をみていく。

船越の安達家(屋号ミソヤ)は、越後国からの移住であるといい、その移住の際の享保20年(1735)の「願」が家系とともにあり、その「願」の中に、「然る処御当国美田村にさば漁商売に年々罷越候に付村方衆中馴染の衆も出来申候」ため引越したいと、「越前国海浦味噌屋仁兵衛二男」の仁太夫が、美田村の庄屋、年寄に願いでている\*13。

この「さば漁」について、小泉憲貞は「(安達家の初代が)代々に百余石積ノ船ヲ以テ商売ス移住ノ際四ツ張網使用隠岐国ニテノ嚙矢トス同氏の家系に顯然タリ」としている\*14。

これを受けて、『黒木村誌』では、「仁兵衛は宝永三年に死亡しているから、おそらく元禄年代よりはるばる隠岐へ漁業に来ていたのであろう。(中略)元禄年代より父仁兵衛が舟越においてはじめて鯖網(四ツ張網)漁業をひらいた」と伝えているとしている\*15。

このように四ツ張網がサバ漁として始まったとすると、四ツ張網の主要漁獲対象魚がサバからトビウオに移ったということなる。

昭和のはじめの頃の漁獲状況について、『黒木村誌』所載の「黒木村沿岸漁獲物漁獲高」(黒木村とは船越を含む旧村)をもとに作成した表1をみると、昭和1年(1926)ではトビウオがもっとも高く、全体の54%を占めている。それに対して、9年(1934)では、アワビやワカメなどのカナギ(磯漁)が全体の64%を占めているが、魚種ではシイラがもっとも高く27%を占め、トビウオは11%になっている。昭和のはじめごろ、四ツ張網で獲られていたトビウオは、経済的にみて重要魚種であったが、昭和9年になると全体に占める割合は低下している。四ツ張網は昭和10年代のはじめ頃までおこなわれていたという。

四ツ張網の漁期は6月上旬から7月中旬であった。これは、糸満漁民や与論島漁民の出漁期間中であるが、四ツ張網網に彼ら出漁漁民が参加したことはまったくなかったという。

### (2)四ツ張網漁

山陰沿岸ではトビウオ類はアゴと呼ばれている。さらに、船越では、アゴは、カクアゴ(和名ツクシトビウオ)とマルアゴ(和名ホソトビ)の2種類が区別されており、船越で四ツ張網の漁獲対象になっていたのはマルアゴの方で、以下、アゴという場合は、マルアゴを指している。

船越では、四ツ張網は元網、新網、孫網(大正網)の3つの網組からなっていた。四ツ張網は2隻のテエナ船(カンコ)と4隻のガワブネ(リョウセン)からなり、テエナ船には2人、ガワブネには4人乗っており、一つの網組は20人からなっていた。

四ツ張網は、夜間テエナ船で火を焚いて魚群を誘集し、集魚群をガワブネ4隻で張られた網の上に移動させて、魚群が網上に至ると網を引き上げて魚を袋網に捕獲するという漁法である\*16。集魚のために火を焚く船をテエナ船、この船に乗って火を焚いて集魚誘導する者をテエナという。テエナは、スナワをたらしアゴの集まり具合を判断する。テエナ船はふつうテエナが出し、ミソコ(袋網)、カガタ(火を焚く鉄具)もテエナが管理した。

テエナをやった人を聞くと、孫網(大正網)の場合、屋号でヒラタヤ、キヤ、フジタヤ、ウエノキタヤといった家にはほぼ決まっており、キヤやフジタヤはガワブネの船主でもあったという。集魚をする年長のテエナになる人は、毎年ほぼ決まっており、同じ人がやったといえる。また、テエナが同時にガワブネの船主でもある場合もあった。

### (3)テエナと集魚技術

テエナとは、船を漕ぐこととたいまつ(火)の番をするものと、スナワ(25ヒロほどの縄の先に石をつけたもの)をたらしアゴの集魚状態を判断するものがない、とくに、集魚状態を判断する年長のテエナは経験のある者がやり、テエナの集魚技術は漁獲と密接にかかわった。このテエナの集魚技術についてみる。

アゴは産卵のために接岸するのであって、船越の漁師によれば、マルアゴは白砂を好み、10から12、3ヒロの海底の砂地に腹をつけてすわっており、藻場に産卵するという。海底の魚群は、幾重にも重なってぎっしりと静止してすわっているというが、この集魚の状態を判断するために、テエナはスナワを海底にたらし、スナワにアゴがぶつかる具合からみるという。

スナワをたらし、1尺ぐらいあげるとアゴがあたりなくなるのは、アゴが海底に張ったようになっていくわけで大漁になる。

それに対して、スナワを1尺あげても2尺あげてもアゴがぶつかるのは、アゴが分散しているわけで大漁にならず、この状態を「アゴがハバシイ(賢い)」という。四ツ張網では火を焚くいて魚群を誘導するわけだが、うまくやらないと、群れのまま火について浮いてこないで、アゴはすわったままで動かないという。

アゴは潮流が強すぎると産卵に寄ってこないという。6月ごろにマオキ(北西)から吹く風をイレカゼといい、アゴをナダに入れる風でアゴ漁に適した風である。

四ツ張網の漁場としては、ニグノザ(ヒガシノザ)、ナカノザ、ニシノザがあり、中でもナカノザがナカノホンザといわれて一番よい漁場だったという。ニグノザは海底が浅くあまりよい漁場ではなかったという。そのほかにイザナギノザがあり、ここは番外のザで、いつ使用してもよかったという\*17。漁場使用の慣行を

見ると、その年の四ツ張網漁に最初に出漁する日に、各網組(3統)のテエナが、エビス神社の前でくじをひいた。3人のテエナのうちの1人が3本の藁を握っており、ほかの2人が藁をひく。1番長い藁がニシノザ、2番目がニシノザ、1番短いのがニグノザになる。以後1日ごとに、ニシ、ナカ、ニグ、ニシという順で代わっていった。あまりよくない漁場であるニグノザに当たる短い藁をひくと「ドンだ」といったという。

### (4)テエナの性格

テエナの性格についてまとめる。

漁獲活動において、テエナの集魚技術は漁獲に密接な関係があり、テエナは漁場での漁撈指揮者である。

また、漁撈儀礼との関係からみると\*18、漁撈年中行事において、十日エビス、ミソコイタテ、クロヤキ、カンジョウ祝をテエナが中心になっておこない、十日エビスの役割分担の決定、袋網製作、カンジョウ祝での製造元の会計も、テエナがおこなったという。漁期中行事では、毎出漁時にテエナがエビス社に酒を供え、海に酒を注ぎ、マンナオシにはテエナがエビス像を盗み、テエナ船に積んだ。

つまり、テエナとは、火焚き・集魚の役であるとともに、漁全般に渡る総指揮者でもあった。隠岐島前では、漁全般の指揮者をダイクといったが、船越のテエナはダイクでもあったのである。テエナとなる人はほぼ決まっており、テエナ船の船主であり、ガワブネの所有者であることもあった。

隠岐島前の海士町豊田や崎(中ノ島)、知夫村知夫(知夫里島)では、四ツ張網のタイナ(テエナ)は、火焚き役であり、網の修繕及び乗組員の決定をおこなう総指揮者のダイクは、タイナ(テエナ)とは別にいた\*19。海士町崎では、マンナオシは、テエナとは別のアマダイクがおこなったという(筆者調査)。タイナ(テエナ)は、集魚具合をみて指示をする漁場での漁撈指揮者であっても、同時に乗組員決定や網準備などの漁全体の総指揮者(ダイク)であるとは限らないのである。漁場での漁撈指揮者のテエナが同時にダイクであるという点が、船越のテエナの特徴であるといえる。

## 3 四ツ張網の衰退過程—安達家の『勘定書』を中心に

船越では、昭和10年(1935)前後に、アゴを対象に刺網漁が行われるようになったという。これは各家ごとに行われる個人漁で、ソコダテという底刺網である。前夜に網を漁場にたてておき、翌朝に網を引き上げて刺さっているアゴを獲るといった漁法であった。昭和10年頃まで四ツ張網はおこなわれていたというが、その後、アゴ漁は、四ツ張網から刺網へと移っていく。

その変遷を、安達家所蔵の『勘定書』からみる。糸

満漁民の雇い主であった安達家は、アゴを網元から買い塩アゴにする製造元でもあった。安達家には、明治35, 44, 45年, 大正2, 3, 8~13, 15年, 昭和2, 3, 6~9年の『勘定書』が残っていた。この『勘定書』には、四ツ張網組や各個人漁との勘定が出ている。

たとえば、勘定書には次のように書かれている。

昭和8年(1933)

元網

6月2日	イサキ	26貫8	4円20銭
6月14日	アゴ	4500尾	56円25銭
6月16日	イサキ	160貫	44円80銭
	アゴ	7700尾	97円02銭
6月17日	イサキ		4円50銭
6月18日	イサキ	35貫	10円50銭
6月19日	イサキ	8貫6	2円58銭
6月20日	イサキ	70貫	21円
6月24日	イサキ	70貫	21円
	口銭		261円85銭
	計		10円47銭4厘
	上記		272円32円4厘
	差引		120円45円
			151円87銭4厘

元網とは四ツ張網の網組である。昭和8年の場合、8回安達家に出し、261円85銭の総漁獲高である。口銭とは、漁業者と安達家のあいだにたつ者に支払われるのであり、4%がかかっている。さらに、上記とは、安達家から網組に対して燃料代や網代を貸し付けた分が記されており、それを総漁獲高から引かれているので、網組の実質漁獲高としては、差し引き151円87銭4厘

(口銭含む)となる。また、総漁獲高のうち、アゴが153円27銭、イサキが108円58銭で、アゴが59%、イサキが41%を占めたことがわかる。

また、個人漁の出荷については次のように記されている。

昭和9年(1934)

中新屋

6月28日	アゴ	750尾	3円
	口銭		0円12銭
			3円12銭

昭和9年に、中新屋が6月28日に安達家へ1回出しており、アゴを759尾だし、漁獲高3円12銭(口銭含む)だったことがわかる。

そこで、まず、この勘定書から、明治から昭和までに四ツ張網漁の各網組が安達家に出荷した総漁獲高を魚種別に集計した。また、各網組が安達家に出荷したなかで、総漁獲高に占めるアゴの割合をアゴ率として示した。その結果が表2である。表2から、明治の終わりころには、アゴとサバが四ツ張網から出されているが、大正3年(1914)から昭和7年(1932)まではアゴのみである(アゴ率100%)。大正になって新しくできた四ツ張網組である大正網(聞書では孫網として出てくる)はアゴのみを出しているが、昭和6年(1931)以降記載はみられない。そして、昭和8年(1933)と9年(1934)になるとアゴのほかにイサキが入ってくる。昭和8年では、元網のアゴ率が59%、新網からの出荷はすべてイサキである(アゴ率0%)。昭和9年では、元網、新網ともアゴの占める割合(アゴ率)は50%を切っている。逆に、昭和8, 9年には、イサキが多

表1 黒木村の沿岸漁獲高

漁獲物	S1 (円)	構成比	S9 (円)	構成比
ブリ	345	2%	1,084	2%
タイ	680	3%	4,090	9%
トビウオ	11,500	54%	5,304	11%
サバ		0%	1,799	4%
イワシ	450	2%	1,069	2%
シイラ	1,760	8%	591	1%
アワビ		0%	522	1%
サザエ		0%	522	1%
イカ	420	2%	470	1%
タコ	150	1%	288	1%
ナマコ	640	3%	2,384	5%
ワカメ	1,500	7%	5,352	11%
ノリ		0%	7,191	15%
テングサ	1,500	7%	2,565	5%
その他	2,400	11%	1,627	3%
合計	21,345	100%	47,289	100%

\*【黒木村誌】より(569頁)

表2 四ツ張網漁の網組別魚種別出荷額推移

\*単位：円，小数点以下，銭・厘

		m35	m44	m45	t 2	t 3	t 8	t 9	t 10
元網	アゴ		11.645	39.12		49.432	160.43	197.32	142.86
	サバ	34.96		128.314	99.9				
	イサキ								
	その他								
	総漁獲高	38.96	11.645	167.434	99.9	49.432	160.43	197.32	142.86
	アゴ率	0	100	23	0	100	100	100	100
新網	アゴ		178.3	3.318		32.65	340.29	198.33	172.7
	サバ	38.594		37.772	87.3				
	イサキ								
	総漁獲高	38.594	178.3	41.09	87.3	32.65	340.29	198.33	172.7
		アゴ率	0	100	8	0	100	100	100
大正網	アゴ						625.953	281.4	451.17
	サバ								
	イサキ								
	総漁獲高						625.953	281.4	451.17
		アゴ率					100	100	100

t 12	t 13	t 15	s 2	s 3	s 6	s 7	s 8	s 9	
425.84	101.7	360.94		519.086	39.2		153.27	90	
						108.58	92.31		
		3.45							
425.84	101.7	364.39		519.086	39.2		261.85	182.31	
100	100	99		100	100		59	49	(%)
332.3	503.54	107.387	244.5	364	5.82	198.11		64.42	
							111.815	94.63	
332.3	503.54	107.387	244.5	364	5.82	198.11	111.815	159.05	
100	100	100	100	100	100	100	0	41	(%)
841.3	171.31	43.068	126.93	183.58					
841.3	171.31	43.068	126.93	183.58					
100	100	100	100	100					(%)

く占めていることがわかる。

また、個人漁によるアゴの出荷は、大正10年、昭和3年、8年、9年にみえる。大正10年と昭和3年には1人ずつ出しており、大正10年が1円43銭、昭和3年には65銭と少額であったが、昭和8、9年には、3人ずつが出しており、額も大きくなっている。昭和8年と9年の個人漁（刺網）によるアゴの出荷を表3に表した。問書から、表のA～Cの3人は、四ツ張網の乗組員でもあることがわかった。また、勘定書の日付か

ら、この3人が刺網をおこなっているときは、四ツ張網がおこなわれていない日であることがわかる。

次に、昭和8年と9年の漁獲高について、四ツ張網と個人の刺網漁を比較してみる。表4は四ツ張網の漁獲高を示した。表中の総漁獲高というのは純粋に漁獲量に対する金額であり、実質漁獲高とは総漁獲高から網組への借金と口銭分を差し引いた金額である。また、回数とは、安達家への出荷回数である。そして、四ツ張網組の1回の出荷あたりの実質漁獲高の平均を出し

表3 個人による刺網漁の出荷額  
\*単位：円，小数点以下，銭・厘

昭和8年	
A	31.37
B	5.85
C	2.6
昭和9年	
A	3
B	9.9
B	5.34
C	30.24

出漁漁民が四ツ張網に参加したということはまったくなかったという。そして、移住例もなかった。

このことについて、出漁当時の在来のトビウオ漁業の特徴から考察する。

糸満漁民の隠岐への出漁は大正のころからおこなわれていたというが、西ノ島町船越の安達家との関係による出漁は昭和10年代になってからである。

安達家に四ツ張網組から出されていた魚種をみると、昭和8年と9年にイサキが多く占めている。しかし、昭和8、9年にはアゴ漁が共同漁から個人漁への移行時期にあり、四ツ張網は解体期にあった。そのため、安達家としては、四ツ張網に代わるイサキ漁主体として、糸満漁民を雇ったとみることができる。また、

表4 四ツ張網漁の出荷額

\*単位：円，小数点以下，銭・厘

昭和8年	純粋漁獲高	実質漁獲高(ア)	出荷回数(イ)	ア/イ
元網	261.85	141.4	8	17.675
新網	111.815	37.128	8	4.641
昭和9年	純粋漁獲高	実質漁獲高(ア)	出荷回数(イ)	ア/イ
元網	162.31	-2.075	4	-0.676
新網	159.05	82.675	8	10.334

た。

表3と表4を比較してみる。

昭和8年の場合、1人が1回の漁で、最高31円37銭を出しているのに対し、四ツ張網の場合、実質漁獲高の1回あたりの最高は17円67銭5厘である。さらに、四ツ張網の場合、約20人からなる網組であり、役割の差を考えず純粋に1人あたりをみると、88銭3厘と1円を切ってしまう。また、昭和9年の場合、1人が1回の漁で、最高30円24銭を出しているのに対し、四ツ張網の場合、実質漁獲高の1回あたりの最高は10円33銭4厘である。なかでも、昭和9年の元網の場合、実質漁獲高はマイナスとなってしまう。差し引きされる網組の安達家からの借金（『勘定書』に「上記」として記載された金額）を考えると、四ツ張網が経費のかかる漁になっていることがわかる。そして、刺網と四ツ張網の個人の分配額には、大きな格差が生じている。アゴ漁の漁獲効率からいって、個人漁の刺網の方がはるかによく、四ツ張網は効率の悪い漁となっている。この個人配当の大きな格差、つまり漁獲効率の差が、四ツ張網から刺網へ移行させたといえる。

そして、船越の四ツ張網は、昭和10年代のはじめにはおこなわれなくなる。

#### 4 四ツ張網漁と出漁漁民一屋久島のジキトビ漁との比較

四ツ張網の漁期は6月から7月であり、これは、糸満漁民や与論島漁民の出漁期間中であつたが、彼ら

イサキ漁には、地先沿岸でおこなわれる四ツ張網よりも、より有利な沖合漁場（大森島付近）で漁を展開するために、糸満漁民を雇ったともいえる。

このように糸満漁民の船越への出漁は、在来漁業からみると、四ツ張網の対象魚がアゴからイサキへ変わり、そして、アゴ漁としては四ツ張網から刺網に移行する時期におこなわれたといえることができる。四ツ張網から刺網への移行とは、共同漁から個人漁への移行であり、四ツ張網の解体期である。

次に、出漁漁民がスミテとして参加し移住した鹿児島屋久島中間のジキトビ漁と比較してみる。

昭和のはじめ、村落経済を支えていた屋久島中間のジキトビ漁は、網組の増加と乗組員の不足という状況のなかで、出漁漁民の与論島漁民をスミテとして受け入れることで存続が図られた。それに対して、船越のアゴ漁は、昭和10年代、共同の四ツ張網よりも個人の刺網の方が漁獲効率からいって有利になってくるなかで、共同漁としての四ツ張網を解体して個人漁化を進めることによって、アゴ漁を存続させたのである。そして、個人漁として展開する船越のアゴ刺網が、糸満漁民や与論島漁民の出漁漁民との接点になることはなかったのである。

さらに、船越の四ツ張網漁自体の性格について、屋久島中間のジキトビ漁の性格と比較してみる。

船越の四ツ張網が対象としたマルアゴとは和名ホソトビである。屋久島のジキトビとは和名ツクシトビウオである。ツクシトビウオとホソトビの産卵を比較すると、ツクシトビウオは「深さ7~20メートルの海藻

の叢生した場所」であり、ホソトビは「沿岸から1海里以上の沖合いの深さ20~30メートル暗礁、浅堆」とあり、ツクシトビウオが沿岸近くで産卵することがわかる。ツクシトビウオはトビウオ類の中でもっとも沿岸性が著しいという。<sup>\*20</sup>。マルアゴとジキトビでは、同じトビウオ類でも産卵生態が異なっている。さらに、産卵と漁獲の関係からいって、もっとも異なっているのは、産卵前か産卵後かの点である。

屋久島のジキトビ漁では、沿岸のセ(岩場)で産卵放精したジキトビが一斉に沖へ出ていくところ(デイオ)を、正確に予測するためにスミテ(もぐり手)の潜水技術と眼力が必要とされた。スミテは、魚の動きのもっともかかわり漁獲上重要な役割を果たす漁撈指揮者である。このスミテという部分において、与論島からの出漁者は、その潜水力と眼力という能力から求められ、ジキトビ漁へ参加したのであった。隠岐島船越の四ツ張網漁の漁場では、マルアゴの産卵場所が砂浜海岸のなかにほぼ固定しており、おおまかに東・中・西という位置をあらわす名で示されていた。その中でよい漁場・悪い漁場も定まっておき、漁場利用は輪番制であった。産卵前のトビウオを対象とするこの漁は、屋久島のジキトビ漁にくらべて固定的で静的である。

以上から、ジキトビ漁と比較することによって、明らかになる四ツ張網漁の性格についてまとめると、次の2点になる。

第1に、隠岐の四ツ張網漁も屋久島のジキトビ漁もトビウオ類の産卵接岸に対する漁獲活動であるが、隠岐の四ツ張網は産卵直前の静止状態にいるところを漁獲するのに対し、屋久島のジキトビ漁は産卵放精後に一挙に沖へ出ていくところを漁獲する点が大きく異なる。この点が、糸満漁民や与論島漁民にはトビウオ漁といっても屋久島方面の漁とは性格を異にしていた。

第2に、火焚き役のテエナがスナワを海底に垂らして、産卵前のアゴの集魚状態を判断し、そして網へ誘導する技術は、漁獲活動において重要であった。四ツ張網漁において、このテエナが、魚の動きのもっともかかわり漁獲上重要な役割を果たす漁撈指揮者であった。もしも、糸満漁民や与論島漁民がトビウオ漁のエキスパートとして優秀な技術を発揮することができる部分があったとすれば、このテエナの役割であったであろう。屋久島のジキトビ漁の場合、魚の動きのもっともかかわり漁獲上重要な役割を果たす漁撈指揮者であったスミテの役割に、出漁漁民の技術が発揮された。しかし、船越の場合、このテエナが漁撈指揮者であると同時に、漁全般の総指揮者であるダイクであり、船主でもあった。四ツ張網のなかで、出漁漁民がトビウオ漁のエキスパートとして発揮することができる役割(テエナ)は、総指揮者のダイクが備えもっており、出漁漁民が入り込む余地はなかったのである。

漁業移住とは、出漁先の在来漁業の過渡的な状況を

とらえて、出漁漁民の社会的な位置づけを、漁業活動をとおしてつくり出し、獲得することによっておこなわれる。そして、屋久島と比較していえば、隠岐島では、出漁先の在来漁業の過渡的な状況をとらえて出漁はおこなわれたが、出漁先において出漁漁民の社会的な位置づけを、漁業活動をとおしてつくり出し獲得することができなかったために、漁業移住はおこなわれなかったのである。

\*本稿には、平成6年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)(課題番号06710185)、及び、平成7年度科学研究費補助金奨励研究(A)(課題番号07710219)で得られた資料の一部を用いた。

## 註

- \*1 島田正彦「若狭湾における沖繩糸満漁民の追込網漁業について」『西日本漁業経済論集』21, 1981年、及び、中樞興編著「日本における海洋民の総合研究下巻—糸満系漁民を中心として—」九州大学出版会, 1989年。
- \*2 桜田勝徳・山口和雄「隠岐島前漁村探訪記」『日本常民生活資料叢書』20巻, 1973年, 三一書房, 343頁。
- \*3 桜田勝徳「隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書」『日本常民生活資料叢書』24巻, 1973年, 三一書房, 1020~1024頁。
- \*4 前掲書\*3, 1029~1030頁。
- \*5 河岡武春「解説」, 前掲書\*2, 824頁。
- \*6 上田不二夫「戦前期糸満系漁民の出稼ぎ—島根県・隠岐の島安達家と廻高網漁業」『沖繩の海人—糸満漁民の歴史と生活』1991年, 沖繩タイムス社。
- \*7 中樞興編著「日本における海洋民の総合研究—糸満系漁民を中心として—」下巻, 1989年, 九州大学出版会, 208~220頁。
- \*8 野地恒有「与論島出身漁民事績略—特に移住集落形成を中心に—」『日本文化論叢』3号, 1995年。
- \*9 前掲\*8
- \*10 前掲書\*7, 212頁。
- \*11 前掲\*8
- \*12 屋久島のトビウオ漁と出漁漁民については以下の筆者文献において報告。  
「屋久島のトビウオ漁—寄る魚・追う魚—」『民俗』121号, 1985年。  
「ヨロンノ衆の移住集落—屋久島の民俗風土誌(2)—」『日本文化論叢』2号, 1994年。  
「与論島出身漁民事績略—特に移住集落形成を中心に—」(前掲\*8)。
- \*13 安達勇「越前三田村家隠岐安達家 家系解説」1969年, 私家版, 27頁。
- \*14 小泉憲貞「隠岐誌」前編, 1903年, 15頁。
- \*15 永海一正「黒木村誌」1968年, 395頁。
- \*16 四ツ張網の漁法については、野地「隠岐島前の飛魚漁」『隠岐の文化財』1号(1983年)に詳報。
- \*17 漁場の位置関係については、前掲書\*16に詳報。
- \*18 漁撈儀礼については、前掲書\*16に詳報。
- \*19 前掲書\*2, 389頁。
- \*20 今井貞彦「日本近海産トビウオ類生活史の研究—Ⅰ」『鹿児島大学水産学部紀要』第7巻, 1959年。

(平成8年8月20日受理)